

平成21年度 事後評価調書

機関名 アイヌ民族文化研究センター
 研究責任者 研究課長 古原 敏弘
 研究担当者 研究職員 小川 正人

課題番号	アイヌ文化研究一般2106		研究課題名	アイヌ史関係新聞記事資料に関する調査研究(釧路地方)											
課題担当者	1人(人)		研究区分	研究	試験	調査									
共同研究機関(協力機関)			研究期間	16年度~20年度											
			全体所要額(千円)	(一財 1,288)											
研究概要	<p>研究背景 ・研究のニーズ 新聞記事、特に道内各地域の新聞は、その地域的生活文化や住民意識などがより多く反映された、アイヌ史研究の重要な資料群であるが、これまでは一部の地域を除いてほとんど蓄積がなかった。近年、アイヌの歴史・文化に関する学習・伝承活動の広がりや、学校教育における教材づくり等において、より地域と密接に関わる資料・情報が求められている。これら地域発行新聞の記事を、アイヌ史の資料という視点のもとに調査・整理し、適切な解説等を付けて提供することは、アイヌの歴史に関わる基礎的資料の蓄積として重要な意味を持ち、アイヌ史研究の推進に資するものである。</p> <p>・道が取り組む必要性 本研究課題は、アイヌの歴史に対する理解の促進につながるものであるとともに、新聞記事を悉皆的に調査する基礎的作業の比重が高いものであること、全道各地域を包括的に捉える視野と、地域ごとの特徴や資料の蓄積等に関する専門的知見に基づいて進めるべきものであることから、道立の研究機関が率先して取り組む必要性が高いと考えられる。</p> <p>・関係機関等との連携・役割分担 調査に当たっては、資料所蔵機関の協力を得るとともに、他機関(各市町村の自治体史編纂部門など)が有している既存の調査データ等の集約も図りつつ進めている。また成果をこれらの機関に提供している。</p> <p>・これまでの研究成果・知見、外部機関の知見等の活用の考え方 アイヌ史関係新聞記事の調査は、これまでも全道紙やサハリン(樺太)の新聞について幾つかの成果の公刊が見られる。しかしながら、記事が持つ意義や問題点に関する解説を欠くものや、プライバシーに抵触する記事をそのまま掲載するなど取扱い上の注意がなされていないものもみられる。また、道内各地域の地域紙に関する蓄積はほとんど見られない。本課題では、既刊の目録を参考にしつつも、従来の問題点の改善を図りつつ、各地域発行の新聞を体系的に調査し、その成果を蓄積し、適切かつ効果的な成果の提供を行うことを目的としている。前回は、近代を通じて統計上アイヌの人口が最も多い胆振・日高地方(平成13~15年度)を対象とし、今回は、統計上の人口が比較的多く、かつ新聞記事資料の残存状況が良好である釧路地方(平成16~20年度)を対象とした。</p> <p>研究目的 戦前に北海道の各地域で発行された新聞を調査し、掲載されているアイヌ関係記事を収集し、その概要を整理するとともに、記事の内容や特徴を分析することにより、近代アイヌ史の基礎的資料の一つとして整備し、各地域のアイヌの歴史を明らかにする。</p> <p>研究内容(直近の中間評価で内容の変更があった場合は、その内容を記載する) 戦前に北海道の釧路地方で発行された新聞の悉皆調査(所在を確認できるすべての紙面に目を通し、関係情報の有無を点検する)を行い、掲載されているアイヌ関係記事を抽出し収集するとともに、その目録を作成し、全体の概要を把握した。さらに、主要な記事はテキストデータ化し、記事の内容や傾向、特徴等の整理・分析を行った。</p>														
	研究の成果	<p>直近の研究課題評価における総合評価意見及びそれに対する取り組みの状況(直近評価に対する対応の適切性) 【評価】当初の計画どおり取り組みが進められており、引き続き取り組み必要がある。 【対応】当初の計画どおり調査を行い、補足調査や近隣地域(根室地方等)のデータも含め、昨年度中に記事の調査・収集・整理を終了した。</p> <p>研究開始後の事情変更の有無及び対応の状況(状況変化への対応の適切性) 平成20年4月より、本課題の主要な調査対象新聞である『釧路新聞』の所蔵機関が、平成20年4月にそれまでの市立釧路図書館から釧路市総務部地域史料室に変更になったが、調査の条件等の事情に変更はなかった。なお、別途進めていた研究課題「吉田閣関係資料の調査研究」において、釧路地方の新聞記事のスクラップが新たに確認されたことから、若干の補足確認調査を行っている。</p> <p>年次別目標とそれに対応する実績及び研究成果(目標の達成度)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>主な目標(項目)[年次]</th> <th>(直近評価時点における変更点)</th> <th>研究目標に対応する実績等(事後評価時点)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>新聞記事の調査・収集(年度毎に、1901~10、11~20、21~30、31~40年発行分の紙面を調査する) [H16~19年度]</td> <td>(変更なし)</td> <td>この時期の新聞紙で最もまとまって残存している『北東日報』(1901年創刊、同年『釧路新聞』と改題。1941年まで存続)を調査し、関係記事約1,800点を収集した。</td> </tr> <tr> <td>1941年以降発行分の調査及び補足調査、調査のとりまとめ[H20年度]</td> <td>(変更なし)</td> <td>関係記事約200点を収集し、これまでと併せた約2,000点の目録作成と記事内容の分析を行った。</td> </tr> </tbody> </table> <p>研究に係る資源配分の妥当性(研究資源配分の妥当性) 経費等の配分は適切であった。</p>			主な目標(項目)[年次]	(直近評価時点における変更点)	研究目標に対応する実績等(事後評価時点)	新聞記事の調査・収集(年度毎に、1901~10、11~20、21~30、31~40年発行分の紙面を調査する) [H16~19年度]	(変更なし)	この時期の新聞紙で最もまとまって残存している『北東日報』(1901年創刊、同年『釧路新聞』と改題。1941年まで存続)を調査し、関係記事約1,800点を収集した。	1941年以降発行分の調査及び補足調査、調査のとりまとめ[H20年度]	(変更なし)	関係記事約200点を収集し、これまでと併せた約2,000点の目録作成と記事内容の分析を行った。	<p>直近の研究課題評価結果 平成19年度 中間評価 【自己評価】A B C 【総合評価】A B C</p>	
主な目標(項目)[年次]	(直近評価時点における変更点)	研究目標に対応する実績等(事後評価時点)													
新聞記事の調査・収集(年度毎に、1901~10、11~20、21~30、31~40年発行分の紙面を調査する) [H16~19年度]	(変更なし)	この時期の新聞紙で最もまとまって残存している『北東日報』(1901年創刊、同年『釧路新聞』と改題。1941年まで存続)を調査し、関係記事約1,800点を収集した。													
1941年以降発行分の調査及び補足調査、調査のとりまとめ[H20年度]	(変更なし)	関係記事約200点を収集し、これまでと併せた約2,000点の目録作成と記事内容の分析を行った。													
成果の活用策	<p>活用される分野及び具体的な活用方策(成果の活用の可能性) 収集・整理した新聞記事の目録を作成し、主要な記事を翻刻し、それらに解説を付けてとりまとめ、公刊する(成果の公刊は21年度中に着手し、当年度内または22年度前半に刊行する)。今回の調査により従来あまり知られていない内容の記事も明らかになっており、本課題の成果は、アイヌ史の調査研究に関する基礎的な条件整備の一環として、アイヌ史・地域史の研究・学習のための基礎的資料として活用されることが期待できる。</p> <p>今後の対応 本課題により収集したデータについて、将来的には、他の地域のデータと併せて、より網羅的・総合的なデータベースを作成し、インターネット等を含めた、より利用に便利な方法による公開・提供を図る。</p>														
【個別評価】	直近評価に対する対応の適切性		[a]	資源配分の妥当性		[a]									
a・b・c	状況変化への対応の適切性		[a]	成果の活用の可能性		[a]									
	目標の達成度		[a]												
【自己評価】	【説明】本課題により地域の歴史を解明していく上で貴重な基礎資料の蓄積が図られ、さらに新たな研究課題(「アイヌ史関係新聞記事資料に関する調査研究(渡島・檜山地方)へ」とつながることができたことから有意義な研究であった。														
(A)・B・C	追跡評価の必要性														
	当初の目的を達成しており報告書の刊行により普及も図られることから、追跡評価行わない。														
【総合評価】	【意見】本研究はアイヌ史研究の推進に重要な意味を持つ新聞記事資料について調査するものであり、1901年からの釧路地域における関係記事を約2,000点収集するとともに、目録作成と記事内容の分析を行うなど目標を達成し、主要な記事を翻刻し解説を付けてとりまとめ発刊をすることから十分な研究成果が得られている。														
(A)・B・C	追跡評価の必要性														
	無・研究成果については、一般に利用可能な報告書として刊行されることから、追跡評価は実施しない。														

(A)目標を達成し、十分な研究成果が得られている (a)極めて高い、適切である
 (B)目標を概ね達成し、一定の研究成果が得られている (b)高い、概ね適切である
 (C)目標の達成度が低く、十分な研究成果が得られていない (c)低い、改善の余地がある